

賭に負けたらさようなら

Kicks for Cards by Painseeker



1

すでに深夜だった。ぼくたちは何時間もトランプを続けていた。

「もうくたくただよ」

デーヴが不満げに洩らした。ぼくもデーヴもまだ十七歳で、夜中にやるべきことを他に知っていたわけではなかった。ぼくとデーヴ、彼の妹のレイチェルは、二十五セント銀貨をかけるポーカーを何時間もやっていた。もう飽きていた。しかも、ぼくは負けが込んでいたのだ。

とうとうデーヴは「寝る」と宣言して二階に上がっていった。デーヴとレイチェルの両親は旅行に出掛けていた。部家にはぼくとレイチェルだけが残った。レイチェルの友人のジェニファーが来ていたが、彼女はとうの昔に別の部屋で眠っていた。

レイチェルはまだ十四歳だが、年齢にしてはとても魅力的だった。黒く長い髪に黒い瞳。肌は可愛らしく日に焼けていた。背も年齢にしては高く、一六五センチはあっただろう。ほっそりしていたが、胸は豊かに発達しており、空手と水泳で鍛えられていた。彼女はTシャツとスウェットパンツ姿で、裸足だった。レイチェルは、信じられないほど綺麗で長い脚の持ち主だった。

ぼくたちは向かい合って座っていた。レイチェルは、ぼくが彼女に——とくにその脚に魅せられていたことを見抜いているようだった。トランプをしている間、彼女はしばしば、何げなしにぼくの膝の上、股間に近いあたりを脚で触れた。ときには生殖器に触れることもあった。ぼくのペニスは勃起していた。彼女はそれに気づいたが、ちょっとからかうだけで、何も言わなかった。彼女はまだ、男性にあまり興味は持っていないようだった。彼女にとって、男性は空手の相手であり、倒すべき敵だった。彼女は若くしてフェミニストだったのだ。

デーヴが部屋から出ていったため、部屋のなかは中途半端な雰囲気にも包まれた。レイチェルとぼくはトランプを続けたが、もはや言葉も少なく、テレビに気をとられがちだった。空手のコマ―シャルが流れると、彼女は興奮した。彼女は、自分がいかに空手の名手であり、最近のトーナメント大会で、多くの男に勝って優勝したことを自慢げに喋り始めた。ぼくは最初は耳を傾けていたが、次第にうんざりしはじめた。

「わかった、わかった。でもね」

ぼくは彼女をからかった。

「いくら君が強くても、蠅をやっつけることだって出来ないと思うよ」

彼女は怒った。

「あんたなんか、簡単にやつつけちゃうよ。空手やったことないんでしょ？」

「空手なんか習わなくて、君くらい簡単にやつつけるさ」

彼女はいきり立ち、勝負しようぜ、と言いだした。

「なんでそんなに自信あるんだい？」

ぼくは訊ねた。しばらく彼女は黙り、それから、真顔で答えた。

「あんたの弱点」

「俺の弱点？ なんのことだ？」

彼女は微笑んで、カードをテーブルに置いた。

「あんたが男の子だってこと。すべての男の子には弱点があるの」

彼女はそう言い、片方の足の裏をぼくの股間に乗せた。信じられなかった。呆然となった。危うくパンツのなかに射精しそうになった。ぼくは、自分の股間に乗せられた彼女の足を見て、それから彼女の顔に視線を移した。彼女はにやりと笑った。

「あ、興奮してやんの」

彼女は嘲るように、股間をぐりぐりと足で押した。ぼくは困惑した。顔が火照った。彼女は、もうひとつの足をぼくの股間に乗せ、両足の踵でぼくの睾丸を弄びはじめた。

「弱点だって？ へっ。これはね、女の子に触られて男が興奮するところだぜ」

彼女はぼくの股間から足を離し、ぼくの膝の上に置いた。ぼくの股間は痛いくらいに勃起していた。もう一度、彼女の足で撫でてほしかったが、彼女の次の言葉は、それを萎えさせてしまっ

た。

「ペニスのことじゃないよ。私が言ってるのは、あんたのちっちゃな金玉のこと。男の股間は絶好の標的なの。脆くて、傷つきやすくて、信じられないくらい感じやすいの。私はその気になれば、あんたの金玉くらい一蹴りで潰せるんだから」

彼女は再びカードを手にとり、何事もなかったかのようにゲームを再開した。ぼくは彼女の神経が信じられなかった。ぼくは会話を終わらせるつもりはなかった。

「君の弱点は自信過剰ってことみたいだな。そりゃ、ちっちゃな男の子や女の子相手には勝ったかもしれない。でもね、年上の男にも勝てるってほんとに思ってるのか？」

私はそう言った。彼女は静かに自信を込めていった。

「勝ったことあるもん」

それから、脚をあげて私の鼻先にその足裏をつきつけた。

「ちよつと大きいでしょ。厚い板を真つ二つに割ることも出来るのよ。ましてあんたのちっちゃな金玉なんか簡単に潰してみせる。残りの人生をおかまちゃんとして過ごさせてあげる」

彼女は微笑みながら、しかし冷たく言い放った。私は言った。

「俺の金玉の大きさをなんて知ってるのか？」

「知ってるよ。さっき触ったばかりじゃん。すごい小さかった。ほんとに十七歳なの？」
彼女の侮辱的な言葉が吐かれる度に、私のペニスは小さく萎えていった。

「じゃあ、ポーカーの続きをやるうか」

私は仕方なく言った。

「ちよつとやり方を変えない？」

レイチェルが提案した。

「私の賭け額を上げるってのはどう？ 二十五セント銀貨を八枚」

「四ドルかい！」

私は叫んだ。

「俺、もう負けが込んでるし……。俺はいくら負けてたっけ？」

「二十ドル。ここで止めるか、それとも勝負に出るか、どちらかね」

「勝負に出るしかなさそうだな。俺は二十五セント銀貨三枚を上乗せしよう」

私には自信があった。私はエースを三枚、ダイヤを四枚、そしてスペードの10を持っていた。赤字を解消するビッグチャンスだった。

「やめといたほうがいいかもね」

彼女は言った。

「なぜ？」

「もし私が勝ったら、もう払えない額になっちゃうでしょ」

そのとおりだった。

「だから、条件を変えてあげようかと思って」

彼女はカードをいったんテーブルに伏せ、にやりと笑った。

「もし、私が勝ったら、十五分間、私と空手の勝負をするってのはどう？ さっきの言葉をお互いに証明してみせるために」

確かに、今度負けたら私にはどうい払えない負債を背負ってしまうことは事実であった。私は軽い気持ちで申し出を受けることにした。

「いいよ」

「フルコンタクトでね」

「いいね」

「それと……」

彼女は付け加えた。

「金カップはなし、よ」

私はちよつと驚いた。

「俺が金カップを持つてるって、なんで知ってるんだ？」

「ふふ。あんたたち、昨日フットボールをやったでしょ。たぶんそのとき、股間を防御するカップくらいは着けてただろうと推察申し上げたわけ」

彼女はそう言い、

「あんたのほうは何か条件はないの？」

とにやりと笑った。私は自分の手持ちのカードを確認し、ますます自信を深めた。

「俺が勝ったら、俺の股間を十五分間マッサージするのはどうだ？」

私の提案に、彼女はウィンクした。

「いいでしょ。もつとも、この勝負が終わったら、もつと激しいことをあんたの金玉にしてあげることになるだろうけどね」

私たちは勝負に入った。私は、手持ちのカードを表にして見せた。

「エースが三枚。どうだ！」

私は叫んだ。彼女は微笑んだ。彼女がカードを表にした。彼女は2を三枚、エースを一枚、クラブの6を一枚持っていた。

「そら見ろ！」

私は叫んだ。

「エースのほうが2より上。君の負けだ」

私は立ち上がり、踊りはじめた。レイチェルはまたにやりとして言った。

「忘れたの？ 2はワイルドカードだから私はエースを四枚持つてることになる。あなたの負け」

そのとおりだった。私はうなだれた。彼女は椅子に座ったまま、脚を持ち上げ、私の股間を足の裏でつついた。私は抵抗しなかった。彼女は私の目を見つめてからかうように言った。

「可哀相なのジョンくん。この代償は大きいよお」
彼女は股間をつつきながら続けた。

「まずバスルームにいったって、着替えてきたら？ 汗に濡れたパンツを蹴るのはいやだし」
私はショックにうなだれ、バスルームに向かった。背後から彼女の言葉が投げつけられた。
「いい。時間は十五分、フルコンタクト、金カップは無しだからね！」

2

部屋に戻ると、レイチェルはウォーミングアップの最中だった。彼女は前蹴り、後ろ蹴りをや
つて見せた。私は床に腰を下ろし、ストレッチをしながら彼女を見やった。私は自分の窮地を呪
いながらも、彼女のセクシーな脚や揺れる豊かな乳房に見とれていた。

突然、彼女が口を開いた。

「ちよつと考えたんだけど…金カップは着けといたほうがいいんじゃない？ やっぱり将来の
ことを考えるとさ」

彼女の言葉に私は腹を立てた。彼女の自惚れが許せなかった。

「お優しいお心遣いありがとう。でもそんな必要はない」

「本気で心配してあげてるのに。あんただって将来、子供を作りたいでしょ」

「俺は男だぜ。君がどんな手を使ってこようと、全部受け止めて見せるさ」

彼女はしばし黙った。苛立っているようだった。

「私、真剣に言ってるんだからね。金カップを着けなさい。玉が潰れたらどうなるか知ってる？
歩き方は変になるし、声はソプラノになっちゃうし、子供も作れなくなるのよ！」

「心配ないね。俺は君より倍大きいんだ。女の子に負けるわけないだろ」

彼女は口を噤んだ。私はストレッチを再開した。

「私があんたより小さいから、勝てるはずがないと思ってるの？ 私の脚は鍛えられてるし、金
玉はとても柔らかくて、私の蹴りに耐えられるわけないの。私はフェアに勝負して勝ったんだか
ら容赦するつもりはない。でもあんたが金カップを着けなかったら、私は思う存分戦えなくなる
じゃない。あんたを子供を作れない体にしたくないし。金玉が一個潰れるだけですむかもしれないな
いけど、それだけでも大変なことになるのは確か。信じて」

「だったら、ベルトから下は蹴ってはいけないってことにしようぜ」

私の提案を彼女は却下した。

「男の子と戦うときは金玉を狙うのが私の流儀なの。男のシンボルは、女の子に蹴られるために
ついているというのが私の考えなの。だから、あんたと戦うときも金玉を狙わせてもらう。でも、
あんたを永久に不能にはしたくないの！ なんなら、ジェニファーに金玉を潰された男の電話番
号を教えてあげるから聞いてみたらいい。金玉を潰された痛みがどんなものか知りもしないで、

余裕かましてるんじゃないよ。私は厚い板を蹴り割ることだって出来るんだから、あなたの金玉を潰すくらいなんでもないの。子供を欲しいとは思わないの？ 金カップを着けて、この馬鹿」
私は本気で怒った。

「この雌豚！ もうたくさんだ。いまさら条件を変える気なんかない。金カップなんか着けるもんか。女の子なんかに負けるわけないんだから平気さ。蹴れるもんなら蹴ってみなよ。運良く、蹴りが入ったところで、俺にとっちゃなんでもない。俺の金玉を心配するより、自分のことを心配しな。十五分後には泣いて俺に謝ることになるんだから。分かったか！」

十四歳のガキのくせに……。私は我慢出来なかった。さきほど、睾丸を小さいと馬鹿にされたことも私の怒りの火に油を注いでいた。女の子にタマを蹴られたって、どうってことない、と私は思っていた。私は睾丸を蹴られた経験はなかったのだが。

「弱虫がいい気になるんじゃないよ」

彼女は怒って言い返した。

「ちよつとは情けをかけてやるうかと思っただけど、やめた。こうなったら本気であなたの金玉を潰してやる。二つとも潰してやる。思いついた馬鹿野郎！ 二度と勃たなくしてやる。きつと後悔するよ、オナニーするときやよかつたって。こう二度と使えなくなるんだから。あなたの金玉は葡萄のように潰れて、あなたは悲鳴をあげて泣きわめく。もうセックスどころかオナニーも出来なくなる。残りの人生を後悔しながら惨めに過ごす羽目にしてやる。分かったか！」

私はたじろいだ。こんなに怒り狂った彼女を見たことはなかった。返す言葉がなかった。

「どうしたの？」

不意に、ジェニファーが部屋に入ってきた。別の部屋ですでに眠っていた彼女は、レイチェルの激しい叫びに目を覚ましたのだろう。

ジェニファーはレイチェルの道場仲間で、男の睾丸を潰した経験を持っていると聞いていた。レイチェルより年上で二十歳。彼女たちは空手道場で知り合い、友人になった。ジェニファーはすごい美女だった。身長は一八〇センチを越えていて、私よりも高かった。美しい青い瞳、長いプロンドの髪をポニーテールにしていた。豊かな乳房がTシャツの下で揺れ、短いパンツがセクシーな長い脚を剥き出しにしていた。ジェニファーもレイチェルと同様、鍛えられた身体つきだったが、レイチェルと違って肌は真っ白だった。

「あんたたち、いったい何やってるの？」

ジェニファーは訊ねた。

「私がボーカーに勝ったから、空手の勝負をするの。制限時間は十五分。フルコンタクト。金カップを装着しないってのだね。こいつの金玉を蹴ってやる。両手で股間の生殖器の残骸を押さえて、泣きわめくようにしてやる。金玉を潰してやる！」

レイチェルは激しく怒鳴った。ジェニファーが制止するように言った。

「ちょっと待って。彼を殺す気なの？ 知ってるでしょ？ 金玉を強く蹴ったら、相手を不能にするだけじゃなく、殺してしまうことだってあるのよ」

私は思わず唾を飲み込んだ。股間蹴りがそんなに危険だとは知らなかった。

「上等じゃん」

レイチェルは叫んだ。

「最初は金カップなして条件だったけど、私、一回気が変わって、金カップ着けてもいいよって言ってあげたの。でもこいつ、頑固にそんなもん要らないって言い張ったんだよ。こんな奴、二度とセックス出来ないようにしてやるんだから」

「本気なの？ 本気で彼を不能にするつもりなの？」

ジェニファーの問いにレイチェルはにこりと微笑み、私を見た。

「そのつもりよ。どうせこんな男と付き合いたい女の子なんかいやしないんだから」

ジェニファーはなおも彼女を説得しようとした。

「でも大怪我させちゃ、やっぱりまずいよ」

私は信じられなかった。彼女は私のことを嫌っていたはずだった。彼女といちゃいちゃしようとする、ケツを蹴っ飛ばすぞ、と脅されたものだった。だが、彼女は私を助けようとしている。

「ジェニファーだってよく言ってたじゃん、こいつの金玉を蹴り潰してやりたいって」

レイチェルの言葉にジェニファーは口を噤んだ。ほんとか？ 俺の金玉を蹴り潰してやりたい

って？ 私は彼女の脚を見た。彼女の左脚は地面にいたままだったが、彼女は右足の爪先を回すようにストレッチしていた。彼女の足は大ぶりで、美しく伸びた脚は鍛えられていた。その美しい脚に蹴られて、睾丸を潰された男がいたそうだが……。

ジェニファーが口を開いた。

「じゃあ、もう一度チャンスがあれば？ この子の金玉のためにも」

レイチェルは訊ねた。

「どういう意味？」

「コイン投げで決めるの。もし裏が出たら、この勝負はお預け。表が出たら、あなたとだけじゃなく私とも勝負する。十五分のフルコンタクト、金カップなしで。どう？」

「わかった。それでいいよ」

レイチェルはすぐ返事をし、促すように私を見た。ジェニファーは肩こしに私を見つめている。

「わかった。俺もそれでいい」

私の睾丸を蹴り潰したいという女二人に囲まれているのだ。こうなったら賭けるしかない。

「もう一つ条件がある。それぞれ二分間のタイムアウトをとれるってことでどうだ」

二人の女は承知した。ジェニファーがコインを取り出し、空中に放り投げた。裏が出ますように、裏が出ますように……。私は祈った。コインが床に落ちた。

「表だ！」

レイチェルが叫んだ。

「決まりね。これで存分に戦えるってもんよ。さあ覚悟しな。金玉潰してやるから」

悪夢だった。ジェニファーはコインを拾い上げ、ストップウォッチをバッグから取り出し、椅子に腰かけた。レイチェルは部屋のなかのものを片付け始めた。テーブルとテレビを運び出してしまおうと、部屋はかなりの広さだった。大きなカウチだけが残された。

レイチェルが部屋に戻ってきて戦う姿勢をとった。私は彼女を真似てポーズをとった。空手の作法など知らなかったが、せめて知っているように見せ掛けたのだ。

「位置について！」

ジェニファーが叫んだ。私ははっとした。私のペニスは勃起していた。ジェニファーやレイチェルの美しい脚を見せつけられ勃起してしまっていたのだ。私は身を固くした。私はトランクスの下に白いブリーフを履いていた。私の陰囊は、きついブリーフによって固定され、ペニスが勃起しているから、いわば剥き出しで攻撃にさらされている。

私は、なぜレイチェルが私の睾丸を「小さい」と言ったのか理解できなかった。私の年齢にしては十分大きいはずなのだが。私は、女たちに背中を向けてブリーフのなかに手をつっこみ、睾丸を触ってみた。それは固く膨らんでいた。もし、これを潰されたら……。オナニーも出来なくなるのか？ 強く蹴られてもなお、射精することが出来るのか？

私は、レイチェルのほうに向き直り、位置についた。ジェニファーが叫んだ。

「はじめ！」

レイチェルのキックが私の股間に目掛けて飛んできた。それはあらかじめ予想していたことだった。私はさっと腕をおろしてキックを防いだ。だが、それは畏だった。

彼女の握りしめた拳が私の鼻を撃った。ダメージは大きくなかったが、私のプライドを傷つけた。レイチェルは冷笑した。

「そんなに金玉を蹴られるのが怖いのか？ 臆病者」

私たちは、互いに相手の出方を伺いながら、ぐるぐると円を描いて動いた。数秒後、レイチェルが大きく足を踏み出し、再び股間に蹴りを入れた。私はすぐにワナに気づいた。私は右手で股間を防御し、左手で彼女の右の手首をつかんだ。

彼女は今度は左手でパンチを繰り出してきた。私は、右手で彼女の左手首をつかんで防いだ。だがその瞬間だった。彼女の力強いステップキックが私の股間に炸裂したのだ。

ドガッ！

大きな音が彼女の足の甲と私の股間の間で響いた。激痛が私の体を走り抜けた。私は凍りついたように動けなかった。股間に火がついたようだった。激痛がそこから次々と沸き上がってきた。レイチェルは足の甲を私の股間に押し当てたまま、耳元で囁いた。

「1ポイントいただき」

私は体を前に折り曲げ、睾丸を両手で押さえようとしたが、彼女は私の両手首をつかんだまま

放さなかった。彼女は私の股間から足を離し、再び鋭く私の股間を蹴り上げた。さらなる激痛とともに吐き気を覚えた。彼女が三度目の睾丸蹴りを放った直後、私は解放された。私は激しく痛み睾丸を両手で押さえ、床に這いつくばった。激痛が全身を走り回り息をすることすら困難だった。

レイチェルは私の回りを歩きながら言った。

「3ポイント先制。ハットトリックね」

ジェニファーが囁いた。

「やっちゃえ、レイチェル！ 容赦するな。玉を潰しちゃえ、血反吐を吐かせろ！」

私は恐ろしかった。実際にジェニファーは、道場で男に血反吐を吐かせたことがあるらしい。彼は金カップを着けてなかったため、残りの生涯を悪夢のなかで過ごす羽目になった。彼女が素晴らしい速度で彼の股間を蹴り上げたとき、彼は終わってしまった。そのキックはとても速く、いつ足が相手の股間に届いたのかすら見えなかったという。ぐしゃつという大きな音が響き、相手は床に転がった。彼は血反吐を吐いた。彼は気を失い、病院に担ぎこまれたが、両方の睾丸はぐしゃぐしゃに潰れていて、二度とその機能を回復することはなかった。道場の「センセイ」は、金カップを着けていなかった男が悪いのだ、となんの哀れみも表さなかったそうだ。

そのセンセイも女性だというが、ジェニファーやレイチェルや、他の女性たちにどんなことを教えているのだろうか！ なんとか反撃しなければ、どんな汚い手を使っても……。

レイチェルはジェニファーにガッツポーズし、興奮して喋り掛けている。その間に私は呼吸を整え、落ち着きを取り戻した。私は立ち上がり、背後からレイチェルに飛び掛かり、喉を締めた。

「降参しろ！ さもないと、喉笛を潰してやる」

レイチェルは彼女の首を締めつける私の腕をつかみ、喘いだ。不意に、彼女は踵で私の股間を蹴り上げた。再び私の睾丸は火がついたような激痛に包まれた。

私は必死でレイチェルの首にしがみついた。彼女は大きく右脚を胸まで上げ、ふたたび踵を私の股間に打ち込んだ。私の足が床から浮き上がるほどだった。私の睾丸は弾けそうで、脈を打つように痙攣した。私の全身から力が抜けてゆくのを感じられた。だが、私は必死で彼女の首を締めつづけた。レイチェルは喘ぎながら叫んだ。

「手を放せ！ でないと金玉、潰すぞ！」

私は聞き入れなかった。

「降参しないと殺す！」

自分でもびっくりするほど甲高い声だった。

「分かっただけじゃないみたいね」

レイチェルが両足を跳ねあげた。二つの踵が同時に左右の睾丸を撃った。もう一撃されたら確実に潰れてしまいそうだった。私は彼女の首を離し、床に転がり悶絶した。ジェニファーは歓声をあげ、足を踏み鳴らした。

レイチェルは、片膝を立てて床に座り込み、私を睨みつけながら息を整えた。私は転がったまま、右足で彼女の額を蹴ろうとしたが、レイチェルは素早く反応した。私の右足をつかみ、彼女の左肩に乗せた。同時に右足で私の左足を踏みつけ、私の正面に向き直った。彼女の左脚が胸の当たりまで振り上げられ、恐ろしい勢いで私の股間に落ちてきた。彼女の左足の踵が、私の股間で炸裂した。左のほうの睾丸は、危うくその衝撃を逃れた。だが、右の睾丸はまともに打撃を受けた。右の睾丸が、私の股間節と彼女の踵の間でひしゃげた。

レイチェルは私の睾丸に左足を押しつけたまま叫んだ。

「やった！ この感触この感触！ どっちか一個はもう潰れかけてるみたい」

彼女は、ポンプを踏むように、ぐりぐりと私の左の睾丸に圧力をかけた。彼女の顔がこわばり、首筋に血管が浮き上がっていた。私は痙攣しながら身をよじり、なんとか逃れようとしたが無駄だった。死ぬかと思った。私が身を動かす度に、彼女の踵は深く深く私の陰囊に食い込んだ。私は、両手を延ばして彼女の足首をつかんで抵抗した。ジェニファーがわめいた。

「やれ！ もうちよつとよ！ 潰しちゃえ！ 潰しちゃえ！ あんたなら出来る！」

レイチェルは、私の右足を肩からおろして左手で足首をつかみ、床に座った。いわゆる電気按摩の姿勢をとり、私の睾丸を圧迫し続けた。

「もうじき、あんたのちっちゃな金玉が一個潰れるんだよ。ああ早く足の裏で潰れる感触を感じたい。あんたの悲鳴を聞きたい。潰れちゃった金玉をぶらさげて、残りの惨めな人生を送る運命

なんだよ。いまだんな気分ですかあ？」

レイチェルは叫んだ。私は必死で彼女の足首をつかみ、逃れようともがいた。私は背中であつた。やがて壁にぶつかった。レイチェルは尻で移動しながら私の睾丸を圧迫し続けた。

不意にレイチェルは左脚を上げて私の顔を蹴った。まともに私の鼻に当たった。私は思わず、彼女の足首をつかんでいた両手を離して私の顔を守った。同時に、剥き出しになった私の股間を目掛けて彼女の右足が振り上げられた。もし、そのまま蹴られていたら、私の左の睾丸は確実に潰れていたに違いない。

「ま、待った。タイムアウト！ タイムアウトだ！」

私は叫んだ。レイチェルは振り上げた右足を空中で止めた。

「ちえっ！」

彼女は私の両足から手を離して立ち上がった。

「もう一撃で確実に潰してたのに。あと何分残ってるの？」

レイチェルは腹立たしそうにジェニファーに訊ねた。私は床にうずくまり、しばらくは動くことも出来ないでいた。左の睾丸はかなり傷めつけられていたが、潰れていないことを神に感謝した。レイチェルはカウチに腰をおろし、床を睨み付けながら、脚を前に蹴り出していた。その足がクッションに当たる度に、ばすっばすつと重い音を響かせた。

「うるせえなあ。何やってるんだよ」

突然声をした。デーヴが部屋に入ってきたのだ。

デーヴは床にうづくまる私を見て訊ねた。

「どうした、ジョン？ 大丈夫か？」

「ほっときなさいよ、デーヴ」

ジェニファーが答えた。

「あなたの馬鹿なお友達はお友達はポーカールに負けて、私たちと十五分ずつの勝負をすることになったの。フルコンタクトで、金カップ無しでね。いま、あなたの妹と勝負してる最中で、あやうく玉を潰されそうになってタイムアウトをとったところ」

「こりやひでえや！ おい、もうやめやめ。勝負はお預けだ」

デーヴは私のほうに歩み寄り、助け起こそうとした。

「それはないんじゃない？」

ジェニファーが立ち上がり、デーヴのほうに歩み寄った。

「だめだ。もうおしまい」

デーヴは答えた。ジェニファーは彼の真正面に立ち、鼻の先で笑いながら言った。

「で、どうしようっての、ちび助くん」

ジェニファーはたしかにデーヴより背が高かった。デーヴは一六五センチくらいで、ジェニファーは一八〇センチを越えていた。ジェニファーはデーヴを見下ろした。デーヴが言い返そうと

した瞬間、彼女は両手で彼の肩をつかみ、股間をまともに膝で蹴り上げた。デーヴの体が一瞬宙に浮いた。デーヴは苦痛の悲鳴をあげ、床に転がった。息も絶え絶えに呻き声をあげて悶絶した。

ジェニファーは、容赦なくその襟首をつかんで引き起こし、壁に叩きつけ、パンチとキックを雨あられと見舞った。デーヴは壁に背中を押しつけて座り込み、両手を振り回して防ごうとしたが、無駄だった。ジェニファーが片脚を振り上げた。股間を踏みつけるつもりだ。彼女は言った。

「あんたみたいな間抜けに私たちを止められるとも思ったの？ 思い上がるんじゃないよ、このチビ！ あなたの金玉を踏みつぶして、二度と使えないようにしてやる」

私は、ジェニファーがデーヴの睾丸をミンチのようにしてしまう前に、なんとかしなければ、と思った。私は立ち上がり、ジェニファーの方に歩きだした。

二、三步前に出たところで、ジェニファーが肩ごしに私を見た。次の瞬間、彼女は私の股間をめぐめて、目にも止まらぬすばらしいバックキックを放った。狙いは正確だった。彼女の踵が私の睾丸を過たずに撃った。私が反応する前に、二度目のバックキックが同じ箇所を狙い撃った。私は気分が悪くなり、体を前に折り曲げた。絶えがたい断末魔の苦痛が全身を搔きむしり、私は声にならない甲高い呻きを漏らすしかなかった。

「ナイスショット！ ねえ、潰した？ 潰れたような音がしなかった？」

レイチェルが叫んだ。

「潰すまでには至らなかったけど、当分使い物にはならなくなったね」

ジェニフアーはそう答え、再びデーヴを痛めつけはじめた。

断末魔の苦痛のなかで、私は最後の力を振り絞った。体ごとジェニフアーにタックルしていったのだ。私とジェニフアーは、ともに床に倒れた。デーヴが反撃の機会を得て彼女に飛び掛かった。私は彼女の両脚を、デーヴは彼女の両手を押さえて立ち上がった。ジェニフアーは逃れようともがいている。さて、どうしたものか。どこかに埋めてしまうか。デーヴに声をかけようとして、視線のなかに美しい脚が飛び込んできた。レイチェルが背後から私の股間を蹴り上げたのだ。爪先が私の睾丸を撃ち、私は堪らずジェニフアーの両脚を放した。

「やあっ！」

ジェニフアーが声を張り上げ、床に寝たまま爪先で私の股間を蹴り上げた。野球のバットで殴られたような激痛が走った。彼女の脚は長く、私の体が一瞬間に浮いた。睾丸が股間にのめりこむようだった。続けざまに、彼女はもう一度、私の睾丸を爪先で蹴った。

グシャッ！ 嫌な音が響いた。私の体がもう一度宙に浮いた。そのまま私は撥ねとばされ、床にしたたかに背中を打ちつけた。私は血反吐を吐いた。

「潰した！ 今度こそ潰したぞ！ やったあ！」

ジェニフアーが叫んだ。

「さすがジェニフアー！」

レイチェルが応じた。ジェニフアーがレイチェルに言った。

「さ、一人はやっつけた。残る一人はあんたが始末しな」

「まかせて！」

レイチェルは、呆然と立ちすくんでいるデーヴの股間を、激しく足の甲で蹴り上げた。

もう助けにゆく力は残っていないかった。私は床にうつぶせに転がり股間を押さえて悶絶していた。死ぬのかな、と思った。激痛は絶えがたく死んだ方がまだとさえ思えた。左側の睾丸は完全に潰れていた。何か残骸のようなものが残っていたが、丸い球形を保ってはいなかった。

ジェニフアーが立ち上がり、私を見下ろした。彼女は私の背中を蹴って仰向けにさせ、股間に足を置いた。勝ち誇った顔だった。

「気分はどう、坊や？」

彼女は私の耳元でストーン・テンブル・ハイロツツの「クリープ」の歌詞を囁きはじめた。

「あんたは半人前の男…半人前の男」

それから彼女は訊ねた。

「悪い気分じゃないでしょ。私はとてもいい気分よ」

彼女はもう一度私の股間を踏みつけ、離れていった。

意識を失う直前、私はレイチェルがデーヴの背後に立ち、はがい締めをしているのを見た。ジェニフアーが走り寄り、爪先でデーヴの股間を蹴り上げるのを見た。ぐしゃっという音が響いた。

デーヴの体は二十センチほど空中に持ち上げられた。デーヴは悲鳴をあげて倒れた。

「もう一個、潰しちゃったあ！」

ジェニファーが叫んだ。

「ずるいよ、ジェニファー。私が潰したかったのに」

レイチェルが不満げに言った。

デーヴは床に突っ伏して、血反吐を吐いた。私は意識を失った。

3

目を覚ますと、私とデーヴは縛られていた。私たちは壁のなにかにくくり付けられ、両脚は大きく広げられた形で縛られていた。私は服を脱がされパンツひとつだった。デーヴも裸だった。

ずきずきとした激痛が辜丸から立ちのぼり、私の全身をさいなんでいた。私は自分の股間を見た。陰囊はひどく腫れ上がっていたが、左側はべちゃんこだった。デーヴも同じような状況だった。苦悶のうめき声をもらしていたが、意識は戻っていなかった。

レイチェルとジェニファーはトランプをしていた。ジェニファーが気づいたらしく、カードを机に置き、私のほうに歩み寄った。

「おはよう、片金ジョンくん。残ったほうの金玉の具合はどう？」

「いつか、てめえを強姦してやる」

私は小さく唸り声をあげた。

「それはまず無理ね。かわいそうに、コインの裏が出てたら、こんな目にあわずにすんだのに」
ジェニファーは私の鼻先にコインを突きつけた。私と、不運なデーヴの運命を決めたコインだった。コインは表側を向いていた。彼女はそれを私の目の前で裏返して見せた。なんと同じデザインだった。そのコインは両方とも「表」だったのだ！すべては仕組まれていたのだ。

「この雌豚！ 信じられねえ！」

私はわめいた。二人の女は狂ったように笑いだした。私はジェニファーを罵りつづけた。彼女がスリッパを脱ぎ、爪先で私の股間を蹴った。私は断末魔の悲鳴をあげた。彼女は私の広げられた脚の間に片膝を立てて座った。彼女の長い美しい左脚が伸び、その爪先が私のまだ機能している右の辜丸に触れた。

「いま、なんて言った？」

彼女は嘲るように言った。私は答えなかった。

「ちよっと生意気じゃん？ なんで私にお願いしないの、どうか、残った右の金玉は潰さないでいて下さいって？」

もう、抵抗のしようがなかった。私は黙りこんだ。

「あーん？ 聞こえないぞお」

ジェニファーは左脚を私の股間から放し、素早く打ち込んできた。その踵が、私の右の睾丸の二センチほど手前で止まった。

「何か言うことはないの？」

彼女は言った。私は返事をしなかった。

「分かっただけじゃないね」

彼女は立ち上がり、私から離れた。再び私の足元に座った彼女の手には、大型のナイフが握られていた。彼女は何をする気なのか？

ジェニファーはナイフで私のパンツを切り裂き、生殖器を剥き出しにした。私の陰嚢は内出血して膨れ上がっていた。ジェニファーはナイフを拾い上げ、こう言った。

「去勢してあげる。そのほうが惨めな思いをせずにすむだろうから」

私はさっと青ざめた。ジェニファーとレイチェルは、またも私をいたぶろうとしているのだ。

ジェニファーは私の右側の陰嚢にナイフを当てた。いまにも、それを切ってしまうそうだった。私は身動きもできず怯えていた。だが、彼女はナイフを離れた場所に置いて、再び私の広げられた脚の間に座った。彼女は左脚を伸ばして私の股間に置き、残った右側の睾丸を撫で始めた。

「残った左側の睾丸も潰してあげようか。どう？ それが公平というものでしょ」

ふと彼女は叫んだ。

「みてごらん、レイチェル！ こいつ、また勃起してる！」

そのとおり。彼女の巧みな足の愛撫で、私のペニスは勃起しはじめたのだ。レイチェルが笑った。ジェニファーは挑発的な表情で愛撫を続けた。私の股間から性的な興奮が立ちのぼってきた。

レイチェルは立ち上がり、兄のデーヴに歩み寄った。彼女は彼の両脚の間に立ち、右足でデーヴの股間を踏みつけた。

「起きなさい！」

その声にデーヴは目を覚ました。レイチェルは続けた。

「兄貴、起きて。元気そうじゃん。あんたもお友達と一緒に。金玉を半分潰されてる。残ったほうを妹に潰してもらおうなんてどう？」

デーヴの顔が恐怖に凍った。

「や、やめる。俺はお前の兄貴だぞ。ママやパパに見つかったらどうする気だ。殺されるかもしれねえぞ。お前だって、いつか甥っ子が姪っ子が欲しいだろ？ だから、やめてくれ。頼む」

デーヴは懇願した。レイチェルは冷たく答えた。

「やだね。兄貴の子供なんて見たくもない。これは復讐なの。年上で、男だからって、いつも私を苛めてきたじゃないか。でも今日から立場は逆転したよ。二度とセックス出来ないようにしてやる。何を言っても無駄だよ。もしママやパパに言いつけたら、今度は命を貰うからね。それになんて言いつけるつもり？ 甲高い声で、妹に蹴られて金玉を潰されましたって言うわけ？ そ

んな噂が広まったら、一生笑い物になるだけ。わかった？ あんたの負けなの」

デーヴはうなだれて勝ち誇ったレイチェルの言葉を聞いていた。その間、ジェニファーは足による愛撫を続けていた。レイチェルも同じように、デーヴの股間を愛撫した。

「おどろいたあ！」

レイチェルが叫んだ。

「おったつてる。妹に撫でられて興奮してやんの。救いようなない変態だ、こいつ！」

「仕方ねえだろ！」

デーヴが泣きそうな声で抗議した。

「これは自然現象なんだよ。俺にはどうにもならないんだよ。お前に変なことをするつもりなんかないんだから」

「変なことしたくたつて、出来ないでしょ。もうじき潰されるんだから。どうする？ 潰さないでくれってお願ひしないの？ 私、気が変わるかもよ」

レイチェルの嘲るような言葉にデーヴは叫んだ。

「やなことだ。お前にお願ひなんかするもんか。地獄へ行きやがれ！」

「ここまで来て、まだ威張るの？ 頭わるーい！ お勉強が足りないみたいね」

言うなりレイチェルは、踵で彼の残った睾丸を蹴り始めた。デーヴは蹴られる度に絶叫した。

「潰れちまえ！」

レイチェルは蹴る度にそう叫んだ。その蹴りは次第に強くなった。

「潰れる！」

ぐしゃつという音が響いた。デーヴの全身が痙攣し、口から血反吐が嘔き出した。

「やったあ！ やったあ！ とうとう潰しちやっただあ！」

レイチェルは歓喜の叫び声をあげた。

「これで兄貴は玉無し野郎！ これで兄貴は玉無し野郎！ 妹に感謝なさい、これで立派なオカマちゃん！ 立派な片端者！ ざまあみろ、仇はとったぞお！」

彼女は飛び跳ね、勝利のダンスを踊り始めた。

その間もジェニファーの足による愛撫は続いていた。私は、もはや射精寸前だった。

「いききたい？」

ジェニファーが訊ねた。私は夢見心地だった。睾丸を一個潰されたことなどどうでもよかった。世界一セクシーな脚をした女性の、その足で愛撫されているのだから。私は叫んだ。

「いきたい！ いかして下さい！」

ジェニファーは立ち上がり、私のいましめを解いた。そして床に仰向けに寝ころがり、

「立て」

と命じた。私は喜んで従った。私は彼女をまたぐように立った。彼女は左脚を伸ばし、ふたた

私の股間を愛撫しはじめた。驚くべき快感だった。私の潰されたほうの睾丸はまだ痛みを発していたが、残されたほうの睾丸はエクスタシーを感じていた。

「出、出そうだ……」

私は呻いた。その瞬間、ジェニファーが叫んだ。

「いやああああっ！」

彼女の左脚が鋭く私の睾丸を蹴り上げた。鋭い激痛が股間から頭頂までを貫いた。私は空中に投げ出された。着地したとき、私の股間はジェニファーの高く上げられた足に激突した。その瞬間、私は射精し、同時に残った睾丸が潰れた。歓喜と激痛が同時に私を襲い、意識が混濁した。

気がつくとき、私は床に転がって泣き叫んでいた。口から血反吐が漏れていた。苦痛に立つことすら出来なかった。ジェニファーが私を見下ろしていた。

「二度目のほうがよかったですよ？」

ジェニファーは、私が発する断末魔の絶叫に負けないように声を張り上げて訊ねた。

「楽しんでくれた？ 射精するのもこれが最後だからね。オカマの世界へようこそ。金玉を二つとも潰された気分はどう？ もう、性的な楽しみを味わうことは一生ないの。鍛えられた脚の女性が、男の睾丸にどんなことが出来るか、よく分かったでしょ」

ジェニファーは私の背後に膝をつき、私を引き起こした。レイチェルが私の真正面に立ち、私の股間を蹴った。傷口に塩をすり込まれたようなものだった。もう睾丸は二つとも潰れたのだ。これ以上の責め苦を与えたいのか。やめてくれ。もう放してくれ……。

私は再び気を失った。